

国立国語研究所学術情報リポジトリ

9.1.

全国方言準備調査における語彙項目の結果分析と考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002638

9. 方言分布調査研究の意義

9.1. 全国方言準備調査における語彙項目の結果分析と考察

吉田 雅子

(本章は、2010(平成 22)年 3 月 23 日に、国立国語研究所で開催された共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」研究発表会で発表した内容に基づき、記述するものである。)

本章では、2009(平成 21)年に、国立国語研究所全国方言調査委員会委員(同年 10 月より「方言の形成過程解明のための全国方言調査」プロジェクト共同研究者)が実施した「全国方言準備調査」31 地点の調査結果より、語彙分野 124 項目の結果を提示し、その分析と考察を行う。先行調査・言語地図がある項目についてはそれと比較して今回の調査ではどのようなことが見いだされるかを指摘し、新規項目については得られた知見を紹介する。

以上を受けて、同調査の問題点を指摘し、改訂した本調査語彙項目案を提示し、方言の形成過程解明に語彙項目調査がどのように位置づけられるかを考察する。また、本調査に向けて考慮すべき点を、調査項目・調査方法・被調査者条件・分析方法といった観点から考え、今後の展望について論じる。

① 準備調査の項目構成

準備調査における語彙項目は全部で 143 項目(大項目では 124 項目)である。調査項目における「語彙項目の大分類」である「人間関係・生活関係・自然関係・その他」の 4 つと、「LAJ と同項目のもの・新規項目として設けたもの」の観点から分類すると、項目構成は次表のようになる。

	LAJ 項目	新規項目	合計
I 人間関係	35	31	66
II 生活関係	16	20	36
III 自然関係	26	13	39
IV その他	0	2	2
合計	77	66	143

② 準備調査の結果概要

準備調査の結果は調査項目ごとに個別の様相がうかがえるが、概要として述べると以下

の2点が指摘される。

「LAJと同じ調査項目（以下「LAJ項目」）」について、LAJと比較して変化が見られたかという点についてであるが、これは意外と変化がないという結果である。しかしこれは、調査の際の誘導によって語形が出現していることも考えられ、LAJの時代とまったく同じということはできまいが、伝統的な方言形が現れたという事実や、高年層の伝統方言形保持が意味することについては、あらためて検討する必要がある。

次に、新規項目について、新たな知見が得られたかという観点で考えると、次のことが指摘できよう。まず、一般にはよく話題になることでも、全国方言分布の実態が未解明のものの、大雑把な傾向が把握できた。また、若者が用いる新方言が生まれる母体とも言うべき方言形が概観できた、ということである。

③ 語彙項目の分布概観

ここでは具体的にいくつかの分布図を提示しながら、語彙項目の分布について概観する。その上で、その分布についてどのように分析し解釈したか、その分析内容を本調査項目選定に際しどのように検討にいかしたか、という点について述べる。

■LAJとの変化が少ないことが読み取れる例

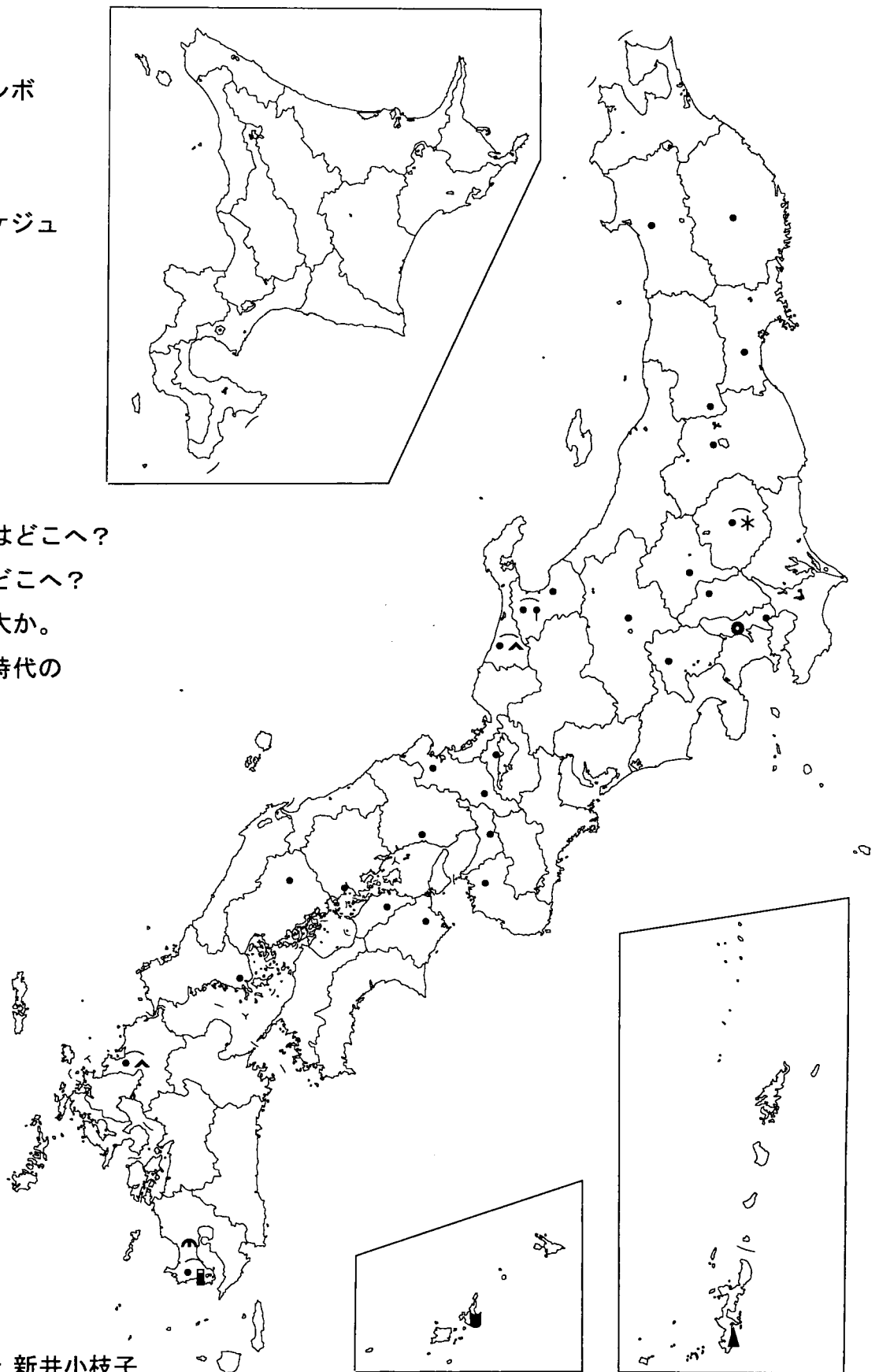
JL-004 とんぼ (LAJ5-231) 作図：新井小枝子

これはLAJと同じ伝統語形が現れているのが栃木のゲンザンボ、鹿児島の子である。東京都立川ではドンブという伝統語形が見える。「とんぼ」は共通語化が進んでいると目されるが、高年層の伝統方言形保持が使用状況とどのように関わっているかや、近世以来の分布比較という観点から、本調査に採用する価値ある項目といえよう。

JL-004 とんぼ

- ・ トンボ † ドンボ
- ドンブ
- △ ヤンマ
- アケシ ▲ アケジュ
- ◡ ボイ
- アヤジ
- * ゲンザンボ

- ・ 東北の { ダンブリ
アケズ } はどこへ？
北九州のエンバはどこへ？
- ・ トンボの地域は拡大か。
と同時に、L A J 時代の
俚言形もみえる。



作図：新井小枝子

■語彙の体系性の観点からの分析

JL-023 じゃがいも(LAJ4-174,175)作図：新井小枝子

JL-024 さつまいも(LAJ4-176)作図：新井小枝子

JL-025 さといも (LAJ4-177,178)作図：新井小枝子

JL-026 やまいも 作図：新井小枝子

JL-027 イモの意味 (LAJ4-179) 作図：新井小枝子

「いも」という共通項目について上記5つの分布図に基づき、本調査項目に採用すべきかについて考察した。体系的な視点を入れて分析すべきだとすれば、「じゃがいも」「さつまいも」「さといも」「やまいも」「イモの意味」の項目全部が必要であると言えよう。しかし準備調査結果を見ると、LAJに項目のある「じゃがいも」「さつまいも」「さといも」「イモの意味」においては変化が小さく、本調査からはこれら「いも」に関する項目を全部削除してもよいとも考えられる。一方、LAJと同項目のものが4つあるからこそ経年変化を知るには「やまいも」も加えた全項目調査する方がよいとも言えるし、また詳細に見れば項目ごころに変化の大小の度合いが異なることも指摘でき、分布変化の実態を把握しうる項目となりうる。

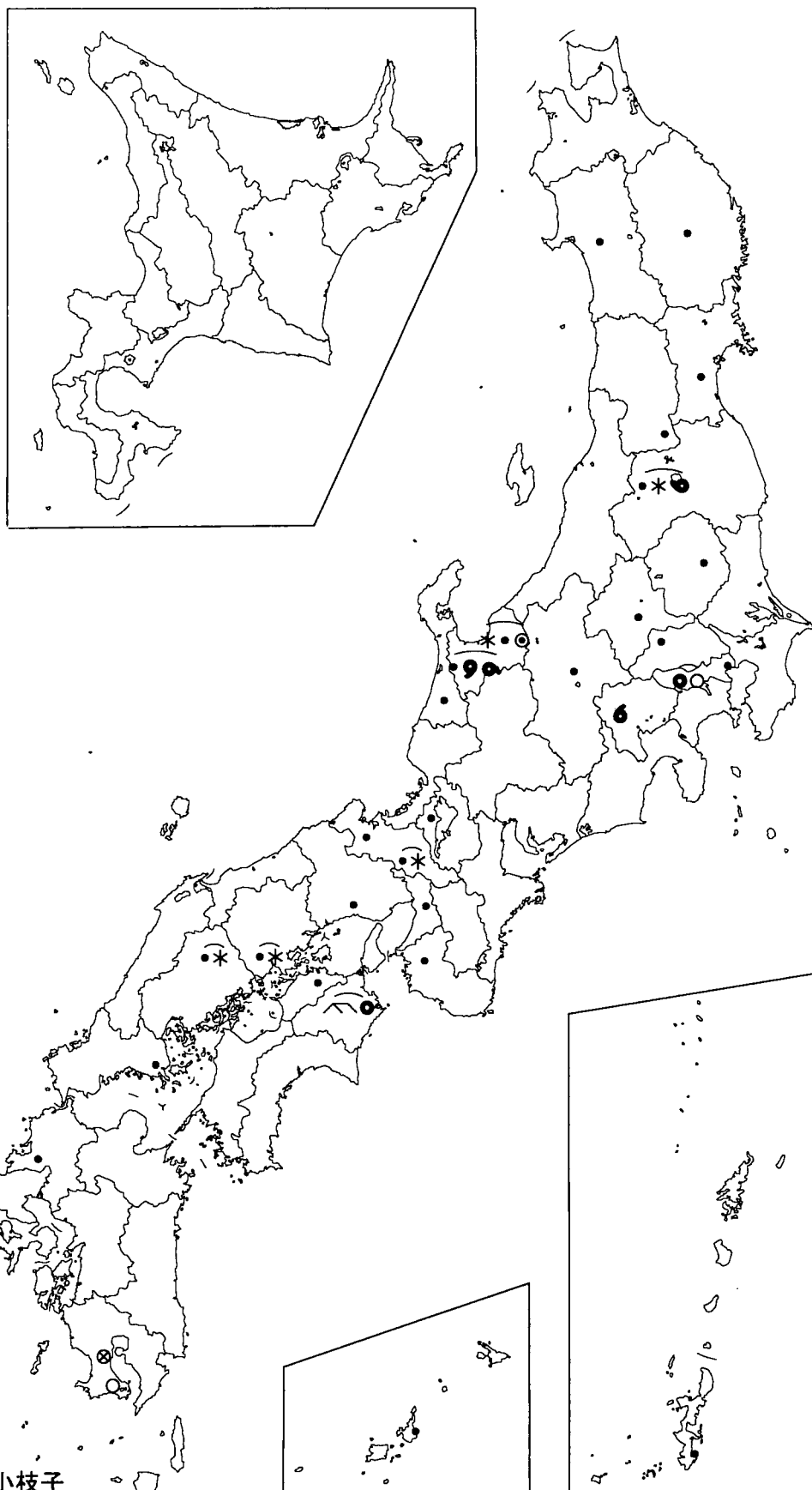
結局、本調査の項目として採用したのは「やまいも」を除く、すなわちLAJと同項目の「じゃがいも」「さつまいも」「さといも」「イモの意味」である。先に述べたように語彙の体系性を考察するためには「やまいも」が入ることが望ましいが、調査項目の数に限りもあり、1つ除くとしたらという観点で「やまいも」を除くという判断になった。

JL-023 ジャがいも

- ジャガイモ
- ジャガタラ (イモ)
 - ○ ジャガタ
 - ⊗ ジャガタロ
- ◎ ジャガラ
- へ ニドイモ
- カンプラ
- 9 テンテコイモ
 - ● テンコロイモ
- 6 ノトロ
- * バレーショ

・ L A J にみられる俚言形の
衰退が著しいか？
『方言の読本』 p. 139

作図：新井小枝子



・ サツマイモ

● サツマ

* カライモ

■ リューキイモ

↑ ウム

| イモ

■ オイモサン・オイモ

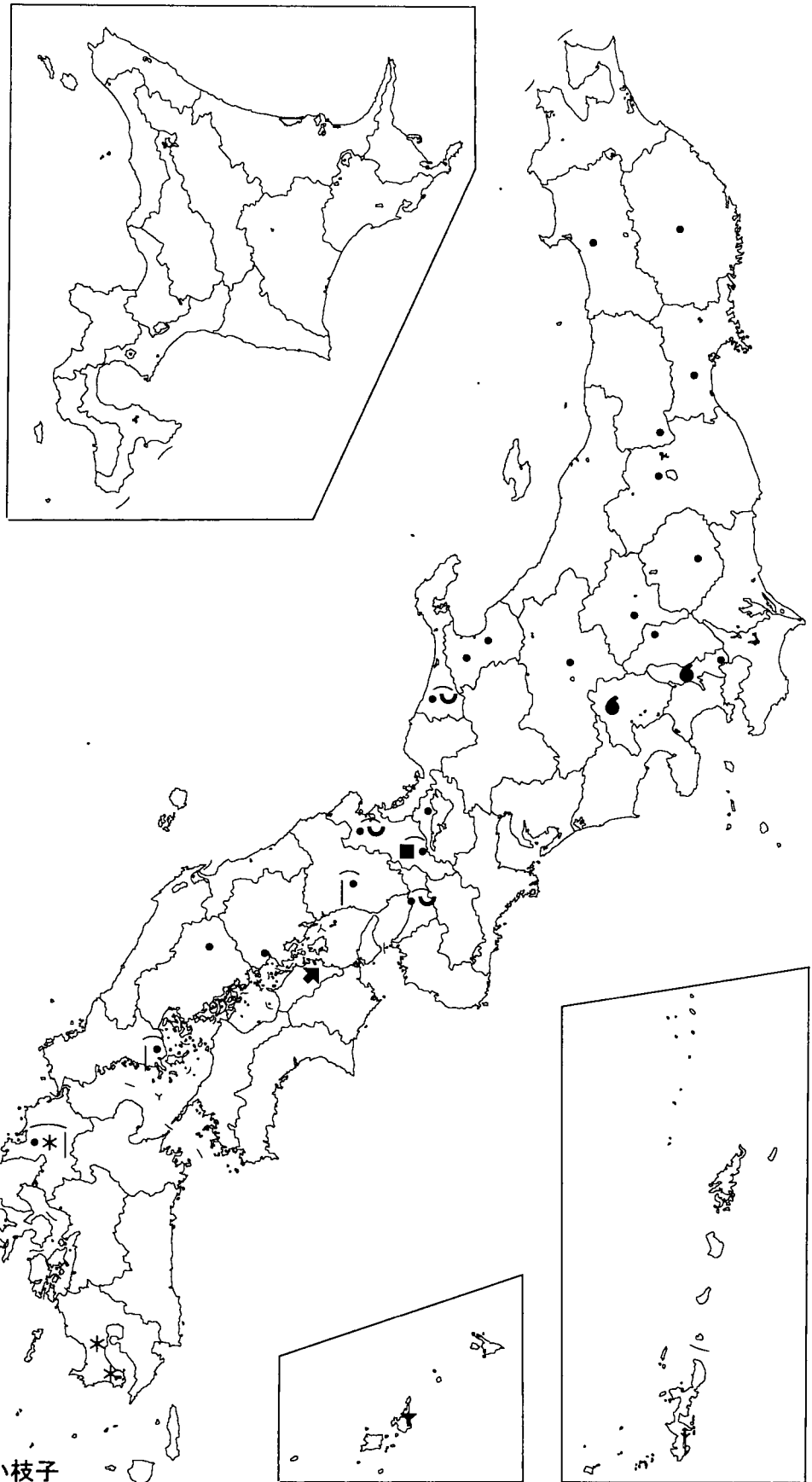
▽ アンガ

∪ カンショ

・ 分布の状況・語形ともに
ほとんど変化がないのか？

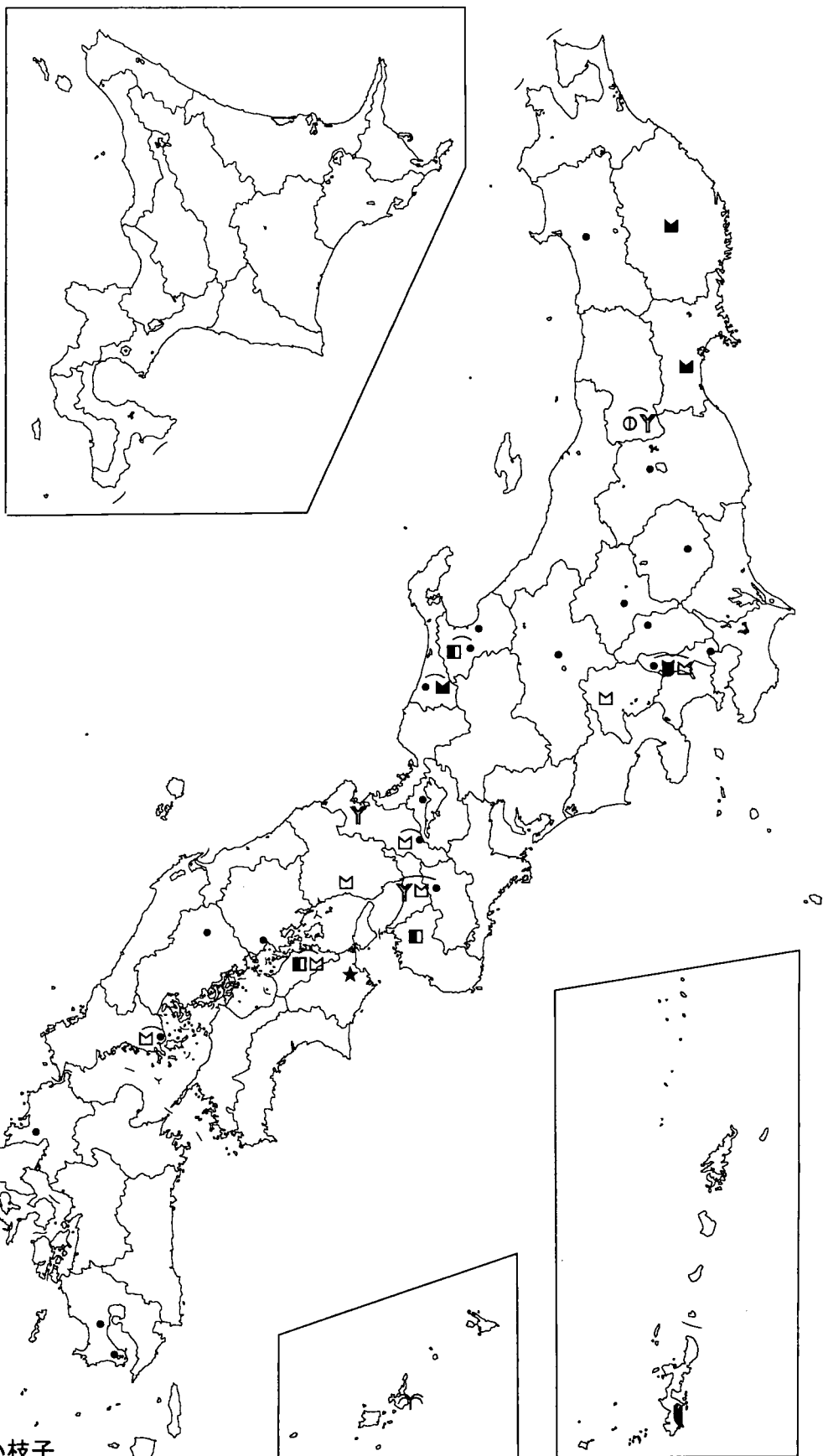
『方言の読本』 p. 143

作図：新井小枝子



JL-025 さといも

- ・ サトイモ ○ イモコ
- タイモ
- イモノコ ■ マゴイモ
- コイモ・ホイモ
- ㄚ ズイキ（イモ） ★ ジーモ
- ㄣ チンヌク
- ㄞ ムジ



・ 分布の状況・語形ともに
ほとんど変化がないのか？

『方言の読本』 p. 141

作図：新井小枝子

JL-026 やまいも

- ヤマイモ
- タロイモ
- ⊕ トロロ（イモ） ⊕ トロイモ
- ナガイモ φ トロ
- ラクダイモ
- ダイゴンイモ
- トックリイモ
- ツクネイモ

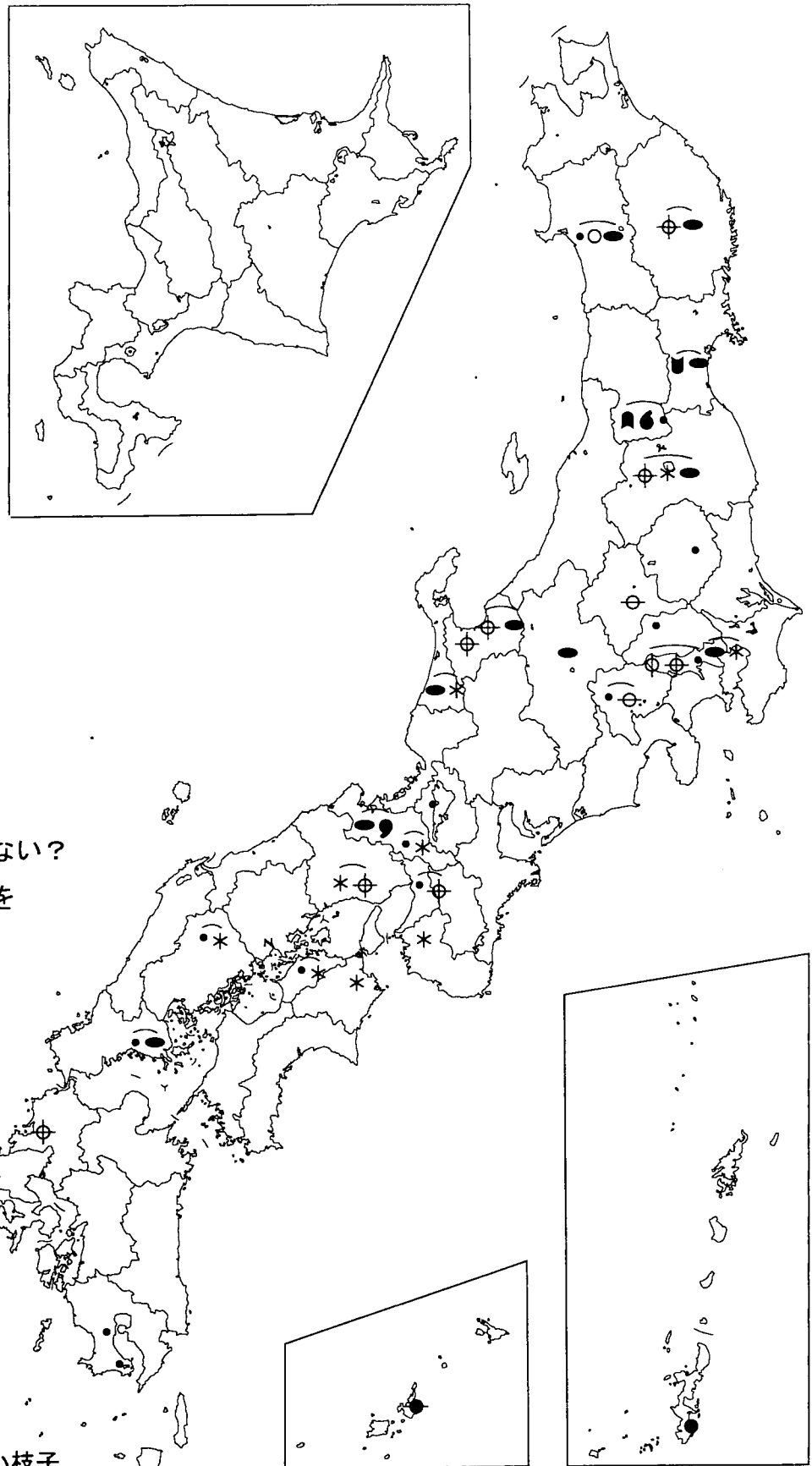
- ヤマウンム
- ウン

* ジネンジョ

~ NR

- ・ ヤマイモの分布域が
意外と広がりをもっていない？
共通語らしい分布の仕方
をしている？

作図：新井小枝子



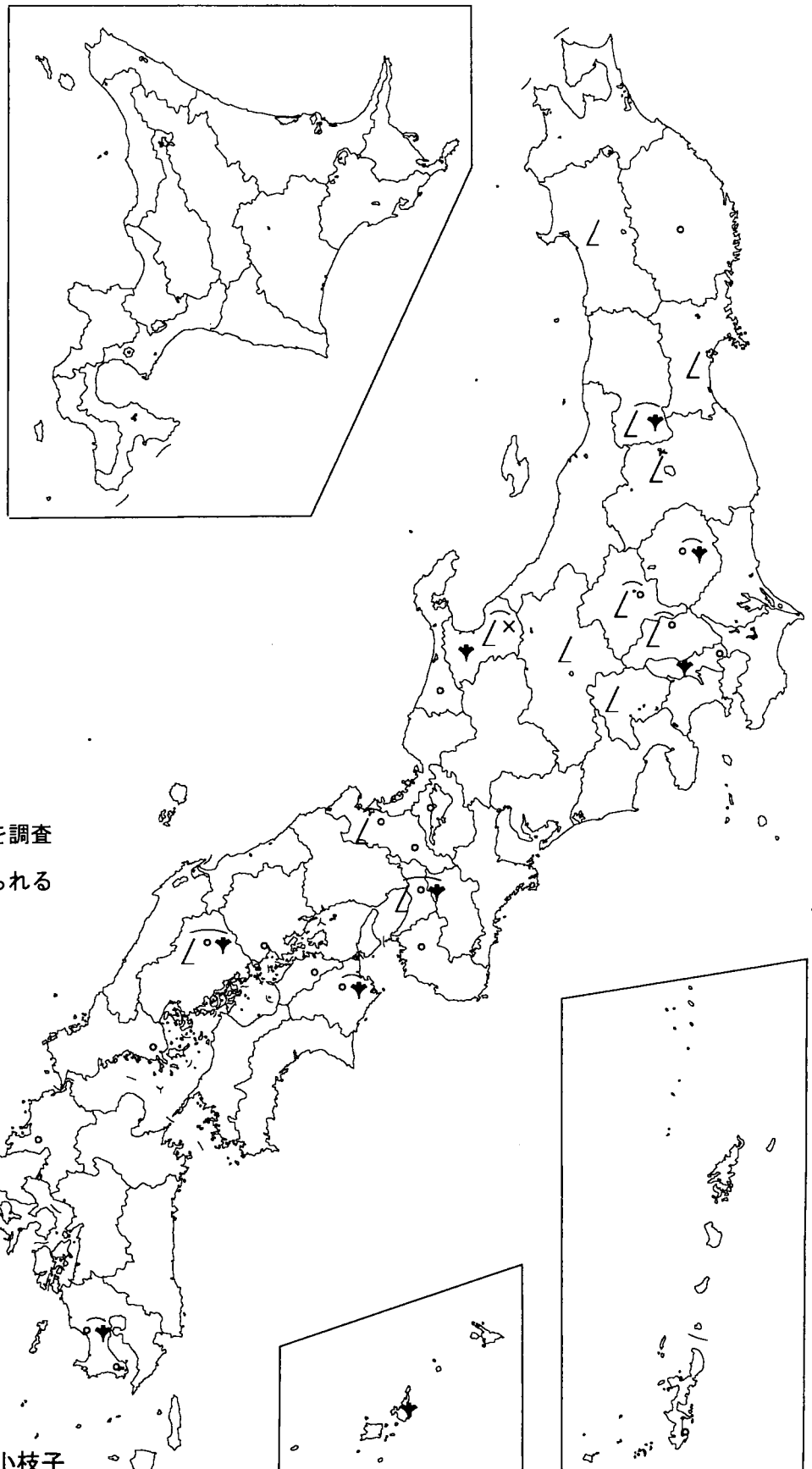
JL-027 イモの意味

- ∟ 〈じゃがいも〉
- 〈さつまいも〉
- ✦ 〈さといも〉
- ◡ 〈やまいも〉
- × その他

- ・ イモと呼べるものにはどんなものがあるか。
 その中で、「イモ」といえば何か？
- ・ 〈さつまいも〉は西日本。
 〈じゃがいも〉は東日本という
 傾向は認められるか？
- ・ 〈さといも〉の分布変化は
 あり？ なし？
- ・ イモが指示する典型的な〈もの〉を調査
 する項目ゆえ、それが効果的に得られる
 ような調査環境と調査文が必要。
 →分布図はえがきにくい？
 記述調査へ

『日本の方言地図』 p. 73

作図：新井小枝子



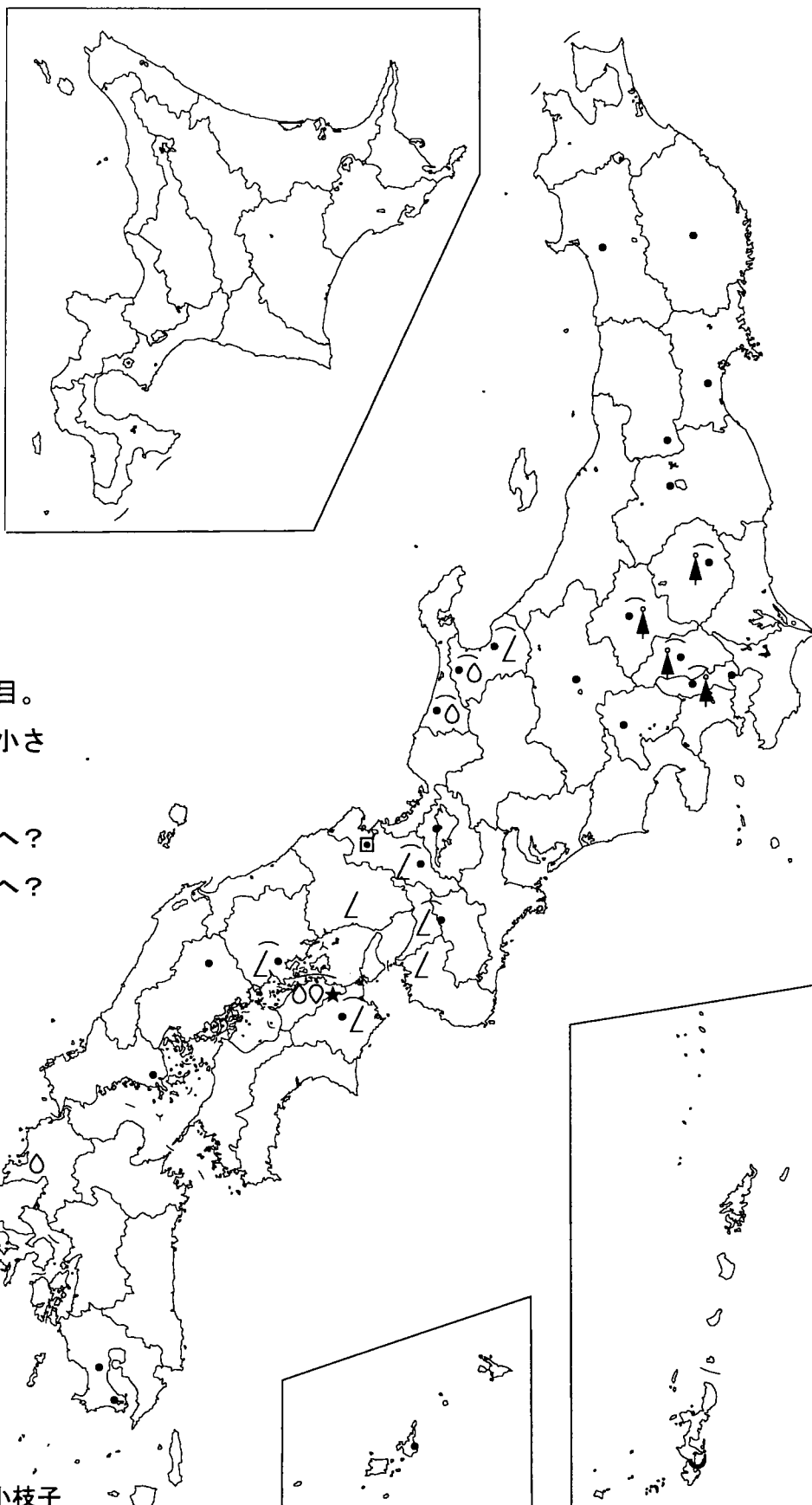
■同音衝突に関わる分析

JL-029 かぼちゃ (LAJ4-180) 作図：新井小枝子

これも LAJ と比較して変化が小さいように見える。関東に現れているトナス，近畿・中国・四国に見えるナンキンなどは，LAJ と非常によく似た分布である。一方，調査地点数の少なさも影響しているであろうが，秋田のドフラ，キントなどは現れていないし，中国四国地方のボーフラも見えない。この点については「ぼうふら（蚊の幼虫）」の項目と「かぼちゃ」とを合わせて本調査項目に選定することで，同音衝突が方言分布事象に関わる様相を考察できると考えられる。

JL-029 かぼちゃ

- カボチャ ◻ ニホンカボチャ
- ▲ トーナス
- ボーブラ ◊ オボラ
- ∠ ナンキン
- ∪ チンクワー
- ★ オチヨーセン



- ・ JL-005 〈ぼうふら〉は関連項目。
- ・ L A J 時代と比較して変化が小さいように見えるが…。
- ・ 秋田のドブラ、キントはどこへ？
中国、四国のボーブラはどこへ？

『方言の読本』 p. 145

作図：新井小枝子

■項目内容と質問文についての検討

JL-035 ひきにく 作図：新井小枝子

この項目は LAJ にはなかった新規項目である。準備調査結果からは西日本ミンチ、東日本ヒキニクという東西対立が予見される。この事象は、一般にはよく話題になることでも、全国方言分布の実態は未解明で、それについてごく大雑把ではあるが傾向が把握できたといえるだろう。新たな変化、未解明の分布を明らかにするために「ひきにく」は調査項目として採用するが、それに関連して WG では「ニクの意味」を尋ねる項目を設定した。

この質問文については、2 案設けた。以下のようなものである。

＜案 1＞このあたりで普通ニクと言ったら、どの肉（〔豚肉〕〔牛肉〕〔鶏肉〕……）のことを言いますか。

①〔豚肉〕 ②〔牛肉〕 ③〔鶏肉〕 ④その他（ ）

＜案 2＞

a. このあたりでは〔ひきにく・ミンチ〕のこともふくめて、肉類のことをまとめて「何と言いますか。焼いたり、揚げたり、煮込んだり、いろいろに料理して食べます。※総称を求め。 ①ニク ②ニク以外（ ）

b. 〔にく〕と言っているものにはどんな肉がありますか。〔にく〕と呼んでいるものの名前をあげてください。※動物の違いによる肉の種類を求め。部位や切り方の違いによる肉の種類は求めない。

c. b の答えの中で、普通「にく」と言ったらどれのことを言いますか。

「ニク」の意味を三段構えにした、＜案 2＞のような質問文案を考案した背景には次のような問題意識がある。

（1）総称は日本全国でニクであるということが前提となってしまうが、本当にこれでいいか。さらに、上位語ニクと下位語〔豚肉〕〔牛肉〕〔鶏肉〕……の関係は、日本全国一様であるということを前提にしてしまうということも気にかかる。実は、この問題点は「イモの意味」の項目でも同じことで、上位語イモと下位語〔馬鈴薯〕〔薩摩芋〕〔里芋〕〔山芋〕の関係が日本全国一様であるということが前提になっってしまう。「ニクの意味」と問う場合、上位語〔肉〕に相当する総称を聞かなくてよいか。上位語に対する下位語は聞かなくてよいか。

（2）「ニクの意味」といっても、実は把握しようとしているものは「意味」ではなく、「ニク」という語で表されるもののうちのもっとも典型的なもの」を聞いているのではないか。「全部ニクです」という回答も認めるか。この問題は「イモの意味」でも同じ。

（3）「ニクの意味」を問う場合、「イモの意味」と違って、下位語にあたる語の調査項目がない。下位語にあたる語の調査をしておく必要があるのではないか。

（4）上位語〔肉〕に対しての下位語は、いくつかの異なる視点があるはずである。例え

ば次のようなものである。

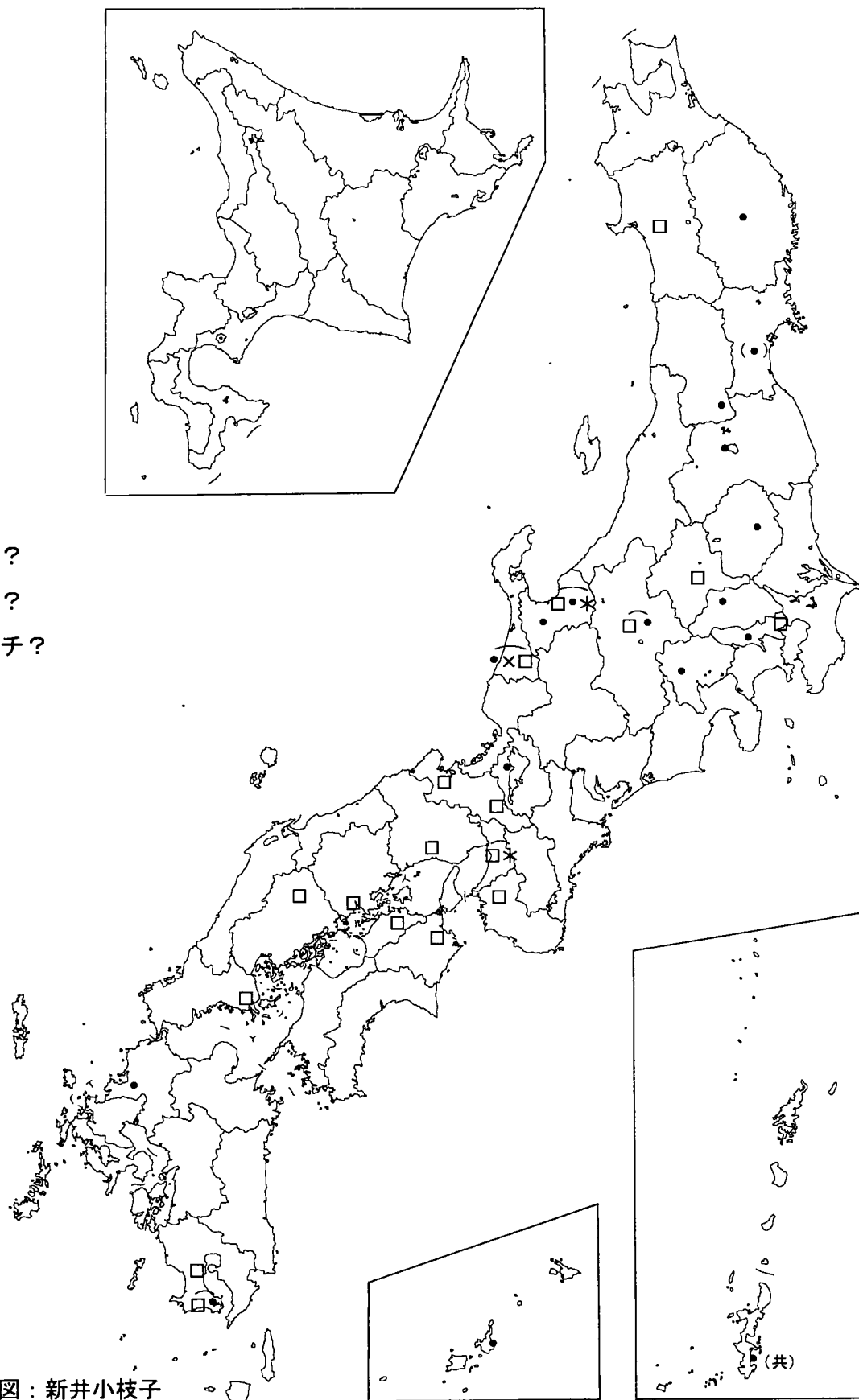
上位語 にく（肉）－

1. 動物の違いによる下位語〈豚肉〉〈牛肉〉〈鶏肉〉…
2. 部位の違いによる下位語〈ヒレ〉〈ロース〉〈胸肉〉…
3. 切り方？違いによる下位語〈挽肉〉〈バラ肉・三枚肉〉…

ここでは、「1. 動物の違いによる下位語」という視点に関しての調査としている。

最終的には＜案1＞の質問文を採用したが、調査項目の質問文作成においては項目内容との関係について十分な吟味をすることが必要であることを主張したい。

- ヒキニク
- ミンチ
- × コマギレ
- * アイビキ



■新方言の母体とも言うべき方言形が概観される例

JL-087-a ととも 作図：新井小枝子

高年層をインフォーマントとした準備調査でも，新方言と見なされる語形が現れている．新方言には伝統方言から派生したとみられる形式も多く，新たな方言の発生と分布形成の解明という点から，本調査でもこの項目を採用することとする．

JL-087-a とても

・ トツテモ, トテモ, トデモ

■ スゴク, スゲー

◎ モノスゴク

▲ ウント

■ テンデ

● エライ

▼ ホンマニ

△ ゴッツイ

◁ ガイニ

▷ ブチ

◎ トツケモナイ

♣ アッゼ

♣ ワッゼ

◆ ジコー

◇ シッペ

◇ ドッタイ

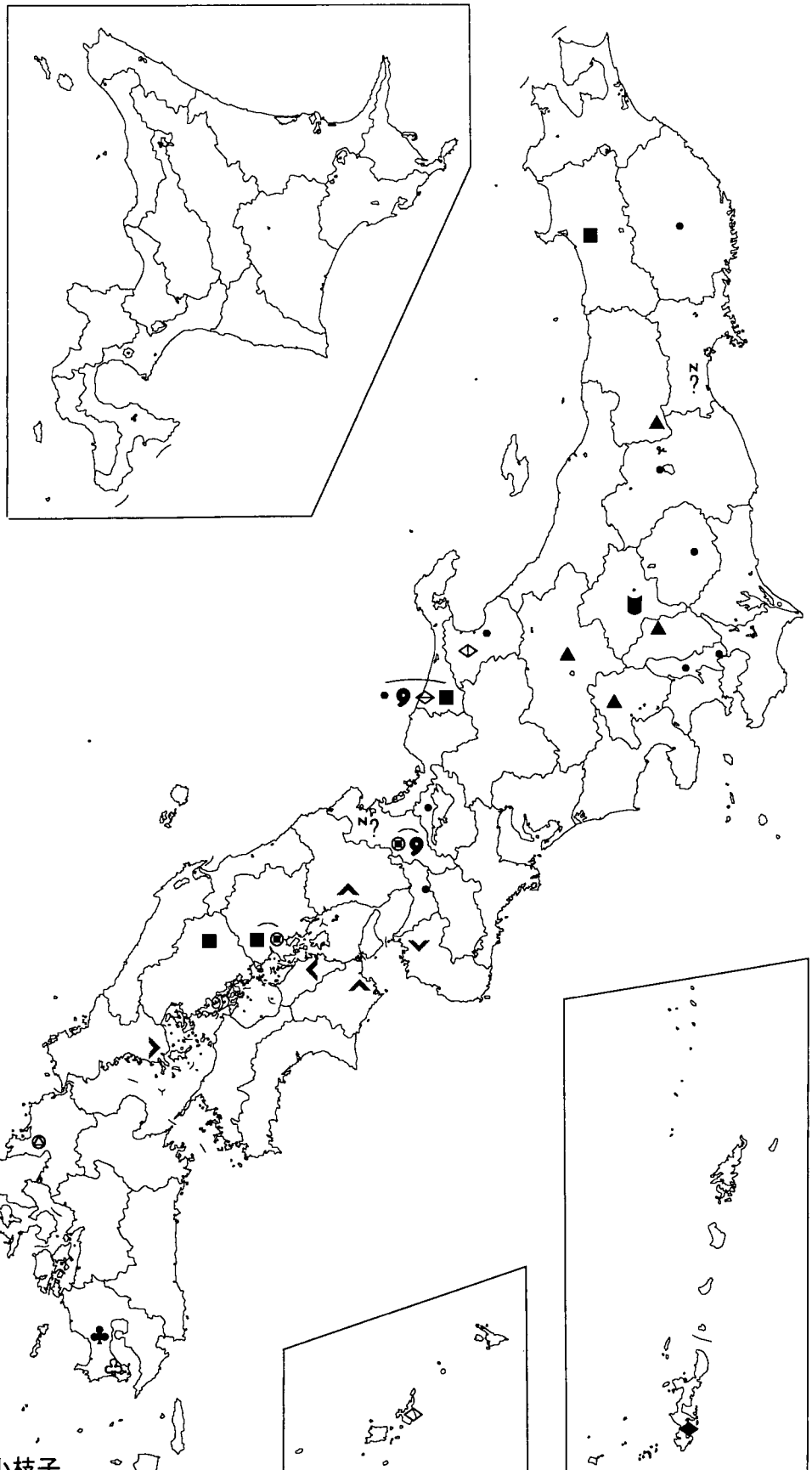
◇ テンポニ

・ 語形の多様性が顕著?

・ トテモ系は東日本に
広がりのある語形?

・ 新たな変化は, 何を目論む?

作図: 新井小枝子



■準備調査から削除した項目、準備調査に入れなかった項目

JL-121 やま 作図：吉田雅子

JL-122 もり(LAJ4-198) 作図：吉田雅子

JL-123 はやし (LAJ4-199) 作図：吉田雅子

この3図については、「はやし」で LAJ と同様、ヤマの分布が意外と多く残っていることが見て取れ興味深い、いずれも本調査項目としては採用しなかった。

これに関連して、準備調査には入れなかったが本調査に入れるべきかと語彙グループで検討した項目例もある。その一例は「た (田)」と「はたけ (畑)」である。

LAJ には「LAJ-185、LAJ-186 た (水田)」と「LAJ-188 はたけ (畑)」の項目があるが、これは何を作っているかで調査をしている。この観点で、本当に調査ができたことになるかという問題意識があった。話者の認識では、その場所に何を作っているかということではなくて、水利権の有無が関わっている可能性がある。この「水利権の有無」という視点を入れ、調査文の改変を施して今回調査する必要はないかという点について、検討した。

結論としては、本調査項目には採用しなかった。これは特に、調査方法の観点から調査項目に入れなかった、ということが大きい。

言語地理学調査のような、200 項目を 1 人で調査するタイプでは、1 項目についてつっこんだ質問をする時間が限られる。記述調査とはその点が異なり、質問はできるだけシンプルの方がよい。今回の調査において、1 項目 1 調査焦点を原則としたのもその考えによる。そうすると、「田、畑、山、森、林」のような項目は、記述調査により適したものであるといえる。

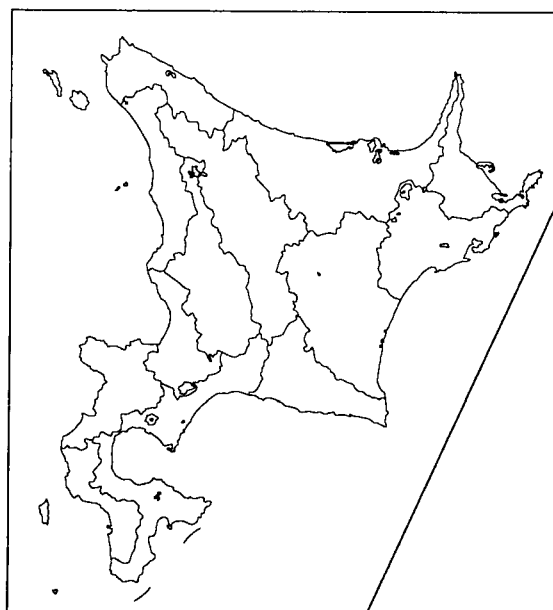
「田、畑、山、森、林」などを考察するには、水利権の有無、自宅との位置関係、土地形状、土地利用などを合わせて聞くことが必要・有効であるが、これらの質問は一問一答式で調査票を埋めていくような言語地理学的調査で行うよりは、一問一答式に加えモノグラフ用メモも多く記録するような記述調査的調査で行う方が適している。例えば「水利権」1 つにしても、利用する共同体ごとに異なり、共同管理か・個人への権利分配方式か、施設としてため池や用水を持つものか・資源として川や池を利用するものか、など、複合的で複雑多岐である。

「田、畑、山、森、林」などの名称については、すでに LAJ や、東北大の小林隆先生主催「消えゆく日本語方言の記録調査」で全国調査がなされ地図化され、グランドデザインは得られる状態にある。これらの項目については、今後は記述調査・詳細調査すべきものであると考え、今回の方言分布調査では項目化しない、という結論に至った。

「田、畑、山、森、林」などについて、質問文を工夫して調査項目化するということも、得られる成果を考えると勧められない。500 地点を 50 人ほどの人が調査することを考えると、回答の質にばらつきが出て、データとして記述分析に耐えうるものが結局得られないおそれがある。

JL-121 やま(山)

- ▲ ヤマ
- △ サトヤマ
- ▲ ヤサン(野山)
- ◎ ハヤシ
- Y ヤブ
- ♣ サンリン
- Y ヨーザイリン
- ↑ ヤシキリン
- N 無回答

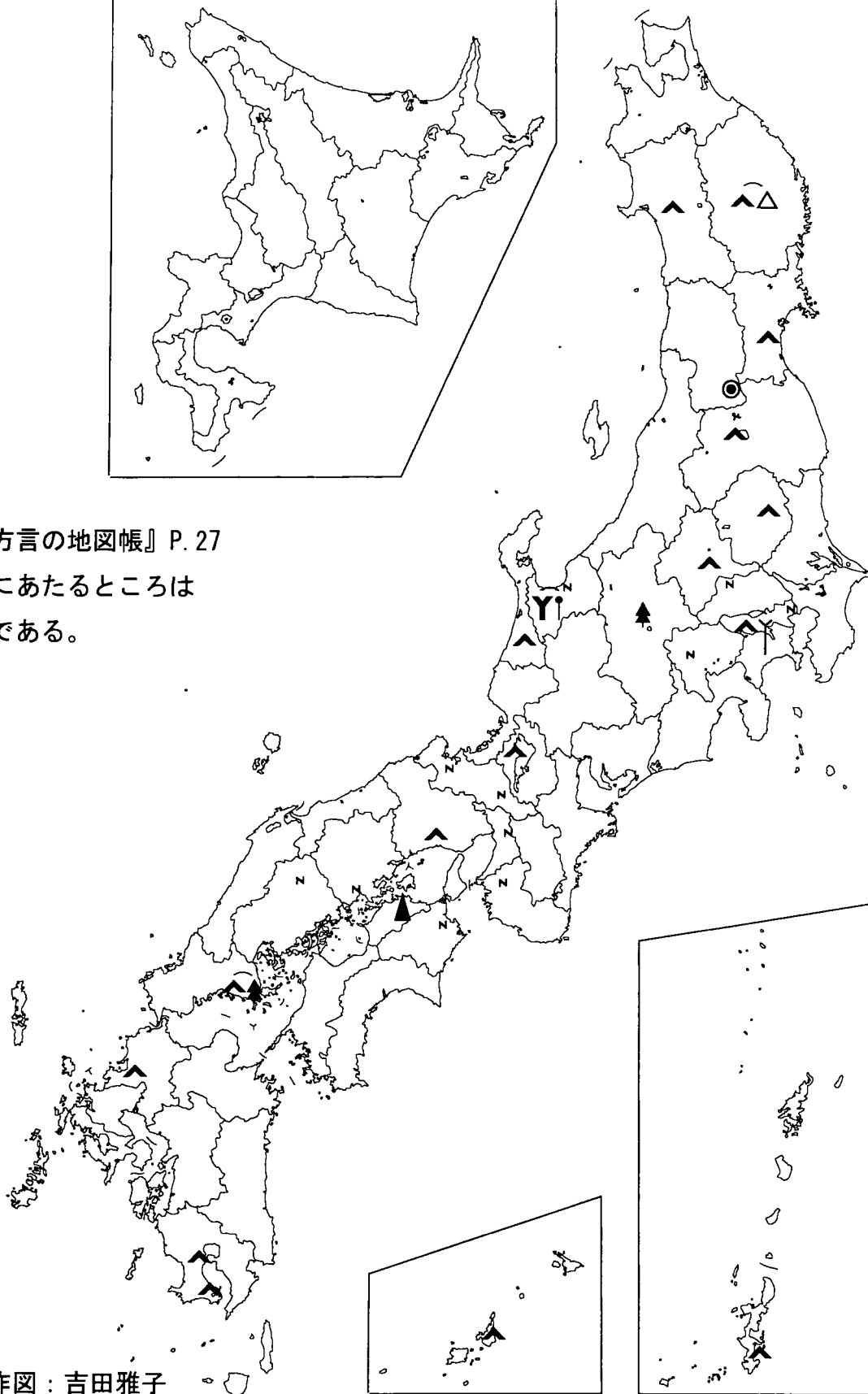


参考「はやし」『方言の地図帳』P. 27

- ・「実感がない」にあたる場所は

もっと多そうである。

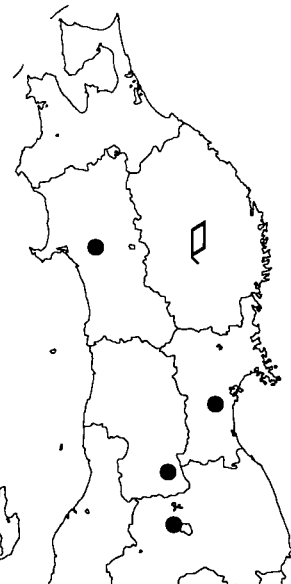
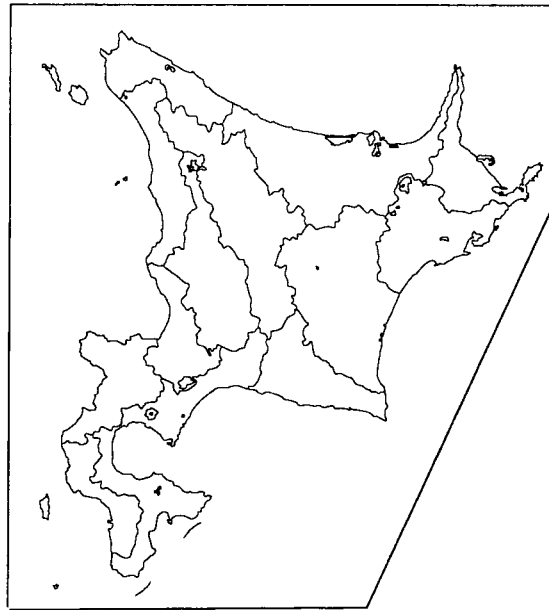
? 実感がない



作図：吉田雅子

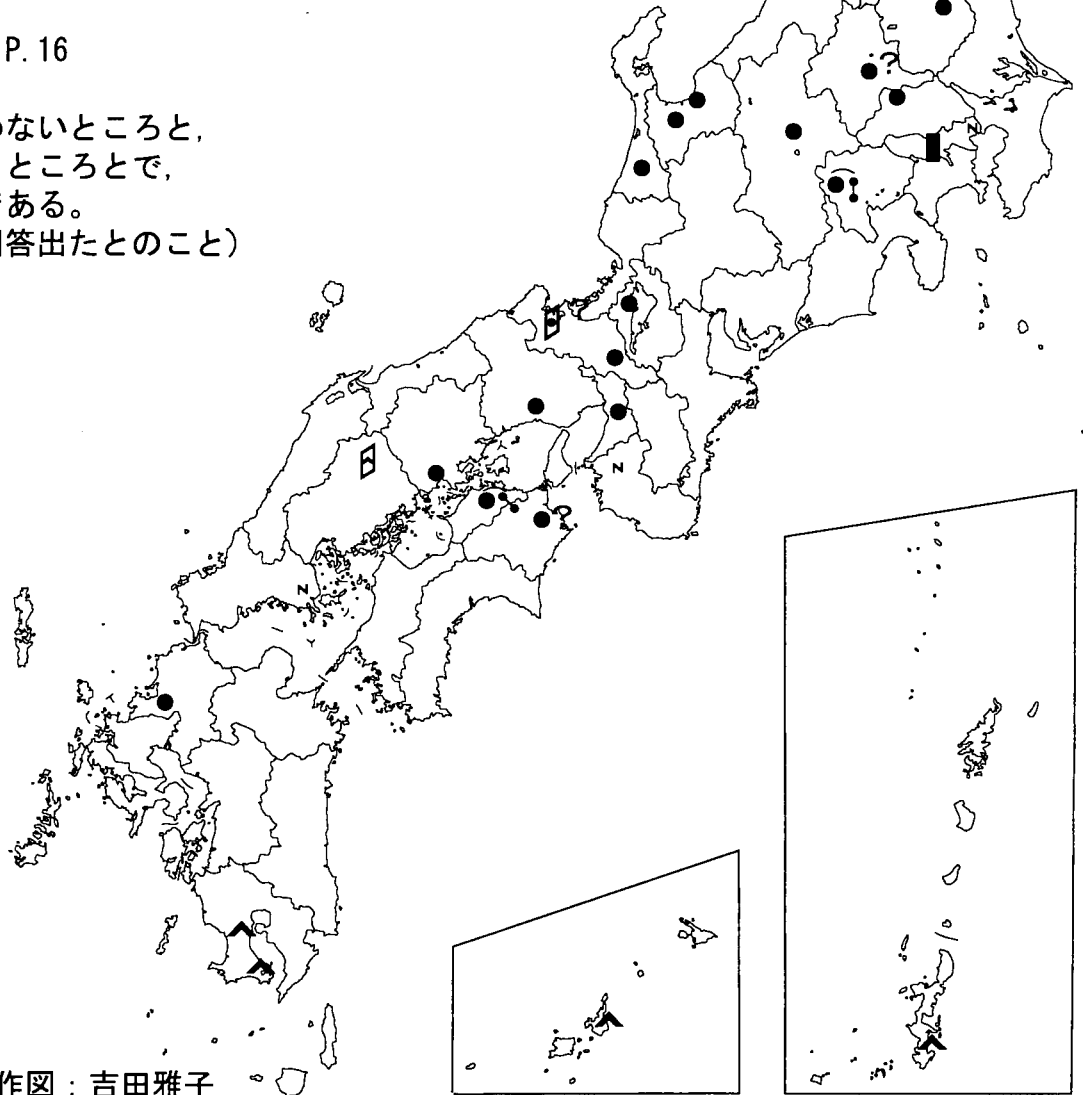
JL-122 もり (森)

- モリ
- ！ ジンジャノモリ
- ノリ
- ◻ オミヤノモリ
- ・ ジンジャバエ
- ▲ ヤマ
- ◻ ミヤヤマ
- ◻ ヤシロ
- ~ 無回答



『方言の地図帳』 P. 16

- ・ 実感がともなわないところと、
すぐ回答が出るところとで、
分かれるようである。
(大阪. すぐ回答出たとのこと)
- ・ ハヤシ現れず。
- ？ 実感がない



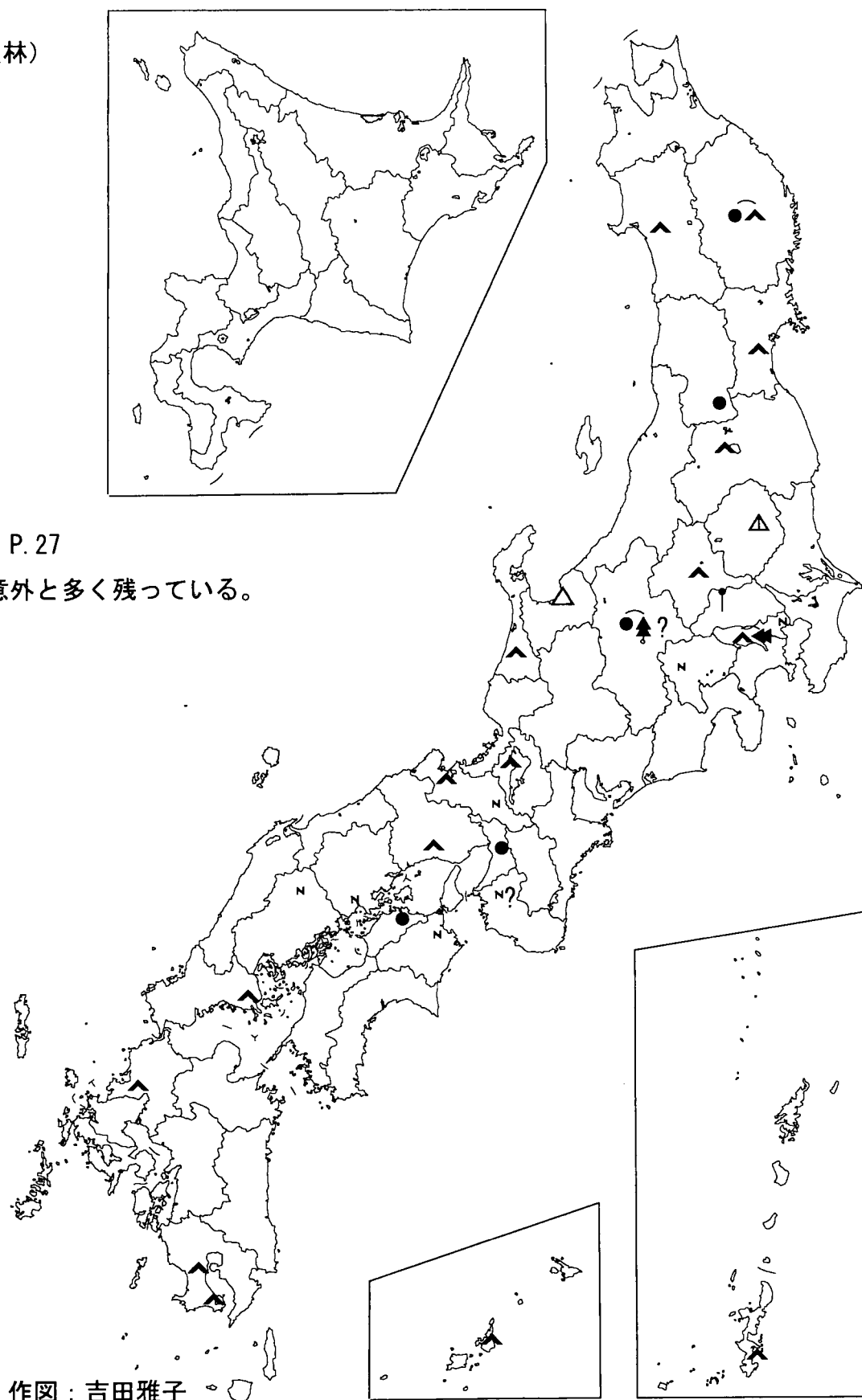
作図：吉田雅子

JL-123 はやし (林)

- ハヤシ
- ▲ ヤマ
- △ サトヤマ
- △ ゾーキヤマ
- ↑ ゾーキバヤシ
- ▲ サンリン
- ◀ ヘーチリン
- ℵ 無回答
- ? 実感がない

『方言の地図帳』P. 27

・ヤマの分布が意外と多く残っている。



作図：吉田雅子

以上、数例ではあるが、準備調査の語彙項目の結果から概観できる分布を紹介し、その分析から読み取れること、本調査項目選定・本調査実施に資することなどについて述べた。

④ 研究遂行にあたって

最後に、準備調査における語彙項目の分析を越え、全体的な視点から、「方言の形成過程解明のための全国方言調査」の遂行にあたり心すべきではないかと考えることについて述べる。

それは以下の5点にまとめられる。

(1)「方言」「言語」の調査研究としての精確さ・厳密さの志向

これはまず、方言研究者・言語の研究者として心がけねばならないことである。研究の中心に据えるのはあくまで「方言」であり「言語」である。方言や言語の研究が即「文化論」となるわけがない。あやふやな文化論に逃げることなく、精確で厳密な方言研究の結果から、他分野・多分野に資するべきである。

(2)調査の質を担保するものの確保

全国規模の調査研究遂行のためには、必要な時間、人員、経費、スペース等を確保することは必須である。これらに窮すれば損なわれるのは調査の質である。全国規模の調査実施は容易にできることではなく、また大規模であるからこそ社会や学界に与える影響も大きい。調査研究の質を落とさないことは重要であり、このための采配と配慮を求めたい。

(3)方言調査・方言研究への正当な評価と理解

方言研究においては、調査が論文に相当する。調査の事前研究の時点から、多大な労力を費やし検討が行われている。事前の調査設計は、言語の体系性についての十分な理解や、言語の社会における使用状況実態についての考察なしにはできないことである。調査コーディネイトには繊細かつ勇気ある判断が求められるし、フィールドワーカーの養成には長い時間と訓練が必要である。方言調査・方言研究とはこのようなものであるということを、評価する立場の者は理解している必要がある。正当な評価が為されなければその分野は疲弊し衰退する。評価者の責任は大きい。

LAJ,GAJ を考えてもそうで、LAJ,GAJ を素材とした査読論文で、LAJ,GAJ そのものよりも高く評価しうるものがこれまでに存在しているだろうか。方言学においては、事前研究や調査実施や調査報告や、調査報告の集積である調査結果データベースが査読論文と同等（かより重要）であるという認識が必要である。

(4)フィールドサイエンス、全国一律大規模調査への正当な評価と理解

(3)と同様である。フィールドサイエンス、全国一律大規模調査は、単に共同研究という名でくくれるものではない。紙と鉛筆があれば一人でできるタイプの調査研究が複数集まる共同研究とは違う。インフォーマントの御協力なしにはできない、人とダイレクトに関わる調査研究である。このタイプの調査研究にかかる労力は、そうでないタイプの調査研究の比ではなく、その点からも、繰り返しになるが正当に評価されることが必要である。

フィールドサイエンスの現場を知らない者に評価されることは避けなければならない。

人文科学のフィールドサイエンスとして、方言学・言語地理学ほどダイナミックで繊細で、そしておもしろいものはないと個人的には思う。

(5)方言調査研究の機会をいただくことへの感謝と謙遜

インフォーマントへの心からの感謝と、方言をお教えいただくことへの敬意。方言学を打ち立てそれを継続させ高く保ち続けてくださった先達たちへの感謝。世界一の数を誇る言語地図を作ってくれたフィールドワーカーたち、そしてそのインフォーマント。それらを忘れてはならない。自分たちが何か高い者であると勘違いすることがないように戒めたい。

主な参考文献・資料

佐藤亮一監修・小学館辞典編集部編 2002H14『お国ことばを知る 方言の地図帳』小学館
尚学図書編 1991H03『方言の読本』小学館

平山輝男 1968S43『日本の方言』講談社（講談社現代新書 160）

徳川宗賢編 1979S54『日本の方言地図』中央公論社（中公新書 533）

平山輝男編 1992H04-1994H06『現代日本語方言大辞典』明治書院

小林隆・澤村美幸 2010H22「消えゆく日本語方言の記録調査－『日本言語地図』との関連で－（2010/03/15 開催「大規模方言データの多角的分析」研究会資料）

付記

- ・発表にあたっての検討は、共同研究者の新井小枝子と共に行った。発表内容の大半は新井の分析によるものである。
- ・発表内容全体の考察については、本プロジェクトの事前研究ワーキンググループメンバーと共に行った作業と検討を通して得たものが非常に多かった。記して御礼申し上げます。

事前研究WGメンバー（複数グループ所属あり）

調査項目構築班

音韻項目G：小西いずみ、竹田晃子

語彙項目G：新井小枝子、吉田雅子

文法項目G：高木千恵、日高水穂、船木礼子

調査結果データベース構築班

調査データG：松丸真大、鎌水兼貴

データ報告・コーディングG：小西いずみ、鎌水兼貴

言語地図データベース構築班：竹田晃子、吉田雅子

- ・言語地図の電子化作業には、外山善朗氏、溝井晴美氏の助力を受けた。これも同じく、記して御礼申し上げます。